

====しばらくの間4ページ建てでお届けしています。====

トピックス 篠崎文化プラザで体験教室が開講

瑞江鶴の会（江戸川区）の宇留野良子師範が、このほど「篠崎文化プラザ」主催の講座で講師を勤めることに決まりました。講座名は「気功太極拳を始めよう」で、10月7日（木）から各木曜日に連続4回の開催が予定されているものです。開催時間は毎回10時から11時30分で、定員15名の募集は10月1日から同所（TEL03-3676-9071）で受け付けるそうです。

“短期間の講座ですが、参加者が太極拳に親しむきっかけになるように頑張りたい”との宇留野師範の抱負です。今回がきっかけとなって継続した会に発展してくれるともっと良いですね。

ちなみに同所は都営地下鉄新宿線篠崎駅に直結した便利な立地で、江戸川総合大学、篠崎図書館、企画ギャラリー等を含む総合的な文化施設で、利用者も多いところです。

健康妄語録 改正臓器移植法は施行されたが？（その2）

もう一度基本的な問題に立ち返りますが、そもそも脳死という概念あるいは用語は臓器移植を前提として定着してきたものです。つまり人工呼吸器の普及によって脳が死んでいるにもかかわらず心肺は機能している。だから心肺の移植が可能である。しかし、生きている人間から心肺を取り出せば殺人行為になる。したがって脳死は死であるという法律の保護が不可避であるということです。欧米ではすでに脳死は一律に人の死という法的前提がありますが、日本ではそこまでのコンセンサスが得られず、先月号でも書きましたように本人の意向が不明でも家族の同意さえあれば脳死者として扱い、本人あるいは家族が臓器提供に反対していれば生体として扱うというきわめてずさんな決着となりました。

ところで、「①脳の機能すべてが不可逆的に停止しているので、遠からず、必ず、死ぬ」「②脳が機能していないので、感覚も心も痛みもまったく無い」という前提から脳死を死者並みに扱っているわけですが、①について言えば、脳死者でも何年も生きながらえている事例が多々あることが問題になっています。これは判定が間違っていたのか、あるいは、脳が死んでも、他の器官が補完的に機能して生き続けられるのか、あるいは脳が回復したのかなどさまざまに考えられます。とくに幼児の場合には回復力が強く長期に生存する事例が多いことも知られています。

②についていえば、現に脳死者を手術する場合には必ず全身麻酔をかけないととても施術できないといわれています。急激な血圧の昇降、発汗、体の動きなどさまざまな生体反応があるところからすれば、脳死者が痛みや、不安を感じていないなどはとても言えないということです。

またところはすべて脳にあるのでしょうか。古今東西、心臓や腸にころや感情が宿っていることを示唆する言葉はたくさんあります。Gut feelingは直感、中国語の腸断または断腸は腹わたがちぎれるほど嘆き悲しむこと、です。日本語でも腹が立つ、腹わたが煮えくり返る、胸が痛む、腹の虫、などなどたくさんあります。以前にも書きましたが、これは動物の進化を考えればごく当然のことなのです。脳が無い、または未発達の下等動物では腸管が考え、判断し、行動しているわけです。動物としての原始的な、基本的な欲望である食欲と排泄欲（生殖欲を含む）を腸管がすべて支配しているわけです。心臓と肺を含むさまざまな内臓器官、そして眼、口、鼻、耳、脳などすべてこの腸管という

原型から進化してきたものばかりです。脳よりも先に腸が考えていたということです。古代人も直感的にその真実を見抜いていたからこそ、このような言葉や表現が生れたというべきでしょう。脳死状態になっても、内臓は脳の支配を受けずにみずから自律的に機能し続けていることもその証左でしょう。脳死者が、おびえ、痛みを感じ、怒り、絶望しながら、心臓を取り出されることを想像するとまさに身の毛のよだつ思いがします。麻酔をすれば済むといったレベルの話ではないと思います。

いずれ心臓が停止して死に至ることが確かなのであれば、なぜその時が訪れるまで治療を続け、家族で看取りをすることが許されないのでしょうか。ましてや万が一にも延命や回復の可能性があるのであればなおさらのことです。生きている心臓を欲しがっている人がいるから死と認定するという事は理由にならない理由でしょう。話が最初から逆立ちしているのがこの臓器移植法であると私は思います。

旅をうたい拳を詠む

米沢を歩く

同好の仲間で米沢市を訪れて、米澤藩時代の歴史遺跡の探訪をしてきました。泊まりは小野小町が開いたという伝説を持つ近郊の小野川温泉でした。作った歌をご紹介します。

御廟所の杉の巨木の梢高く
絹雲のゆく米沢の秋
残月が尾根の上から覗きみる
小町ゆかりの山の湯の街

うこぎ飯に往時を偲ぶ上杉の殿様屋敷の滋味なる昼餼
兼統の兜の上の愛の字は戦の神の頭文字とは *

【写真上； 14代藩主上杉茂憲邸・現上杉記念館



右；直江兼統の兜の前立ち】

* 直江兼統の兜の前立ちの「愛」が、いわゆる愛を意味するものではない事を今回の旅で知りました。そのわけは以下のとおりです。

1. 直江兼統の兜の前立ちは瑞雲の上に愛が乗っている。愛民という意味もあるのかも知れないが、やはり武神である愛宕明神説が妥当なようだ。なぜなら、

2. 上司である上杉景勝の兜の前立ちも瑞雲の上に日輪、そして日輪には日天大勝金剛、摩利支尊天、毘沙門天王の文字が3列に刻まれている。神仏が瑞雲に乗って現れるのは典型的なパターンでもある。さらには、

3. 上杉謙信の兜の前立ちは毘沙門天そのものの像が付いている。謙信の軍旗にはその一字を取った「毘」や「龍」（不動明王の化身）のほか、「愛」もあったそうである。謙信が春日山にあった愛宕神社を上越市に移して、出陣の前には祈願をしていたとの故事もある。したがって、

4. 直江兼統の兜も謙信から譲られたものかも知れない。少なくとも、これらの理由から「愛」は愛



宍明神の意味であると考えられる。ちなみに愛宍明神は勝軍地蔵とも呼ばれ、いわば戦の神様でもある。共通していることはいわば信心している神仏を兜に飾って必勝を期すという気持ちのあらわれか。……とこんなところが、現地で知りえたことに、インターネット上の情報なども参照して類推した結果です。余談ですが、兜の前立ちにはいろいろ変わったものがあるようで、中には毛虫を飾った前立ちもあるそうです。そのころは“前進あるのみ”だそうです。

左顧右眄～さこ・うべん～ (43) 【第5話 「道教」について】

6) 日本における道教などの影響

道教は中国から周辺の国々へさまざまに伝播してゆきました。朝鮮半島、香港、台湾、ベトナム、かつての沖縄、そして日本などです。もちろんそれ以外の地域でも華僑が根を張っているところには必ず道教があり、道観があることはご承知の通りです。

あらゆる日本文化がそうであるように、宗教もまた中国の影響を強く受けていることは当然です。もちろん原始時代にアニミズム的な信仰があったのですが、2～3世紀以降、日本の宗教は中国の儒教、仏教、道教のすべてからさまざまな影響を受けています。というか、中国の思想、文化、芸術、技術、文字（漢字）などを直接に、あるいは朝鮮半島経由で受け入れてきたというべきなのでしょう。もちろん、その多くが渡来人によって直接日本に持ち込まれてきたものであることは言うまでもありません。

百済から402年頃招聘された王仁^{わに}により論語が伝来されたとされています。また同人は道教の知識や呪術の技法をも教えたということです。日本書紀によると27代継体天皇の7年（513）には百済から五経博士段楊爾が来て五経を教えたとあります。また538年には同じく百済から仏教が伝来したとされています。587年の物部氏と蘇我氏のあいだで起きた日本古来の神か伝来した仏教かを巡る争いも有名です。また、易経や陰陽五行説に基づく太陰太陽暦（旧暦）も、中国南朝時代に用いられた、いわゆる元嘉暦が百済経由で伝来して、推古12年（604年）には採用されていたとされています。この頃の五経とは儒家の基本文献である易経、書経、詩経、礼経、春秋経を指しますので、つまり5～6世紀までには、主として朝鮮半島を経由して、古代中国の思想、宗教、文化がすべて伝来してきていたということです。

成立した大和朝廷がその制度、組織、法律に始まり、首都の造営の手法にいたるまで、すべて中国から漢字とともに学んだものをお手本にしていることは明らかですし、「天皇^{てんのう}」という言葉自体がいわゆる中国古代の言葉「天皇^{てんこう}」「天皇大帝」に由来しているとも言われています。また日本本来の宗教、天皇家の宗教と考えられている『神道』も、実はその神々の序列や由来、儀式や呪文などすべて道教のそれを取り入れているに過ぎないという説もあります。

2010年9月には、奈良県明日香村の牽牛子塚古墳^{けんぎゅうしづか}の被葬者が斉明天皇であるという説が有力になったと各新聞がいっせいに報じましたが、これもその八角形の形が道教の宇宙観に由来することがその理由とされています。また高松塚古墳壁画の、四方四神および星辰（星座）などもまさに同様な思想に基づいていることも明らかです。

藤原京、平城京、平安京の場所の選定や設計がすべて風水の原理に則っていることもまたよく知られていることです。さらに言えば、古事記や日本書紀に明記された天皇系図にしても、初代天皇『神武天皇』の即位の紀元前660年はいわゆる十干十二支に基づく辛酉の年（天命によって支配者が換わる、革命がおきる、とされる中国古代の説）であり、この年はまた聖徳太子が活躍した推古9年（601年）の辛酉の年から逆算して設定されたきわめて作意的な年である、というのが最近の定

説です。(余談ですが、この紀元前 660 年の紀元元年から起算して 2600 年目が昭和 15 年 (1940 年) であり、当時の日本政府は「紀元 2600 年」を盛大に祝いました。)

幕末の国学者・平田篤胤^{あつたね}は、当時の主流であった儒教思想の朱子学*を排し、“日本本来の神道”を思想の中軸にすべきであると、いわゆる復古神道を提起して尊王攘夷運動のバックボーンを作ったことでたいへん有名です。右の図は彼の主張する復古神道説の図解ですが、この図はじつは前にご紹介した「道教神の系譜図」にとってもよく似ています。中国古代の天地創造説、道教の天界の神と地上の神との関連、あるいは陰陽思想というものがここに取り込まれていることは一目瞭然です。

日本の神道そのものが、また大和朝廷の祭祀そのものが、本来中国の古代思想、そして儒教や道教、仏教などまで、さまざまなものを取り込んで形成され発展してきたことの証拠のような図であるとも言えます。

日本人の精神的なバックボーンの相当な部分がこうした中国の古代思想、そして儒教、仏教、道教などによって形成されてきたものであることがお分かりいただけると思います。また現在でも日本人の生活習慣や行事の中には中国由来の、儒教とも仏教とも、あるいは道教ともつかない、さまざまなものを取り込まれてきたこともよく分かります。

これらはすべて歴史の長い時間の中で島国である日本の中で緩やかに醸成されてきて、いまや日本人の思想、日本人のものの見方、日本人の宗教観、日本の文化となっているということでもあります。実は、これが道教というものを勉強して得た最大の収穫でした。

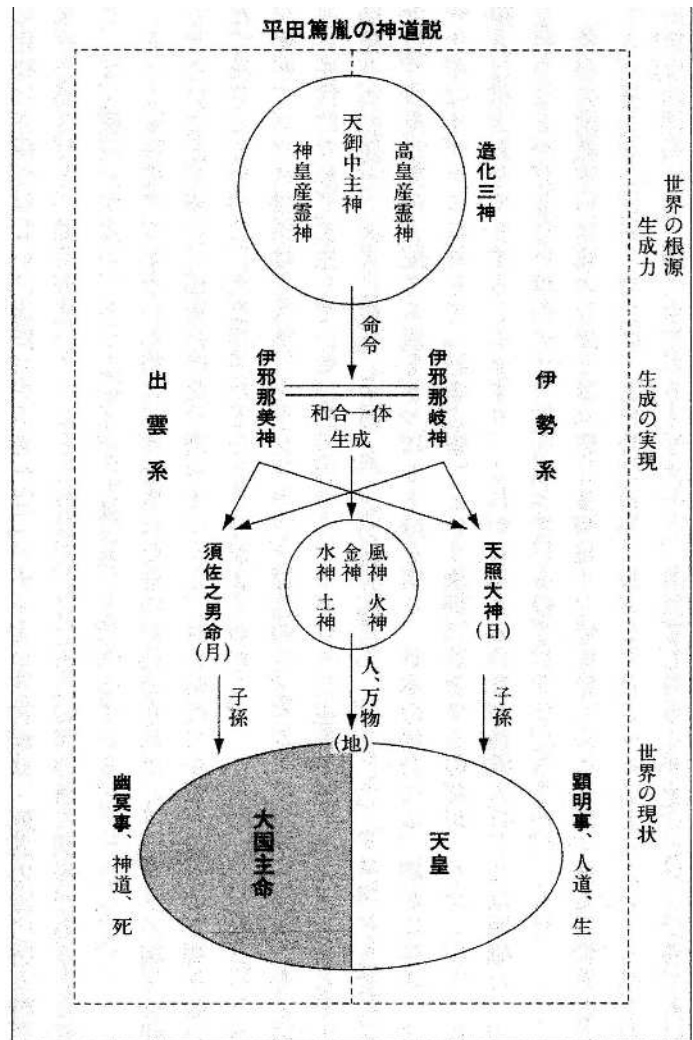


図 1 菅野覚明「神道の逆襲」(講談社現代新書)より

注 1 ; 上の図の上段にある造化三神の読み方 ; 天御中主神 アメノミナカヌシノカミ 高皇産霊神 タカムスビノカミ 神皇産霊神 カミムスビノカミ

注 2 ; *朱子学 ; 南宋時代の儒学者朱子 (朱熹 1130~1200) が大成した学説。仏教なども取り入れた観点から儒学を発展的に解釈した学説。五経に換わって四書 (大学、中庸、論語、孟子) を基本経典とした。日本では江戸幕府が官学として保護したため大いに隆盛した。

お詫びと訂正 ;

9 月号の 4 ページ 8 行目に「黄帝内景経」としましたがこれは「黄庭内景経」の誤りですので訂正いたします。これは中国医学の原典とも言われている「黄帝内经」とは別の、いわば道教の経典のひとつです。なおインターネット上ではすでに訂正済みです。